三重県多気郡明和町
斎宮跡埋蔵文化財調査報告7

史跡斎宮跡

平成元年度現状変更緊急発掘調査報告

平成2年3月

明和町

序

「幻の宮」と呼ばれた斎宮の調査がはじめて行われたのは、昭和45年でありました。そして10年が過ぎ、昭和54年には国史跡の指定を受け、さらに、10年後の平成元年は、斎宮跡が大きく変わった年であります。それは、「斎宮歴史博物館」が開館し、「三重県埋蔵文化財センター」も併設され斎宮跡だけでなく県内の埋蔵文化財の拠点になったこと、また、博物館の建設が決定した昭和61年からすすめてまいりました古里地区北部の公園整備、博物館への進入路である歴史の道、散策道なども完成しました。さらには、史跡の保存・管理・活用と観光とが一体となり文化の振興を図っていくため財団法人「国史跡斎宮跡保存協会」も設立したことであります。

さて、このように斎宮跡の保護・保存・活用が進み、広く国民の遺産として評価される一方、140haに及ぶ広大な史跡内に600世帯もの住民が生活している特殊性から、平成元年度には、57件の現状変更等許可申請が提出されました。これらの中には、史跡整備に伴うものもありますが、個人住宅の新築・増改築や、住民の生活に欠かせない電柱・道路・側溝の改良などがほとんどであります。

この報告書は、その中で事前調査が必要であった16件のうち13件についての結果をまとめたものであります。これらは小規模なものがほとんどでありますが、斎宮跡の究明に貴重な資料を提供してくれるもので、これらの成果の積み重ねにより、斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました地元の方々や、発掘調査及び報告書の作成にご協力いただいた斎宮歴史博物館並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

平成２年３月

明和町長　辻　英　輔

例　　言

1．本書は明和町が平成元年度に実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。なお、第81－３・４・５・６・７・12・14・15・16次の発掘調査は、国庫及び県費の補助金の交付を受けて実施したものであり、第81－１・２・８・９・10・11・13次の調査は、それぞれの原因者が費用を負担したものである。第81－１・２・９次調査については、別途報告書作成の予定である。

2．調査は明和町が調査主体となり、斎宮歴史博物館調査課及び明和町斎宮跡保存対策室が担当した。

3．発掘調査・整理及び本書の作成には、斎宮歴史博物館調査課の田阪仁、泉雄二、上村安生、御村充生及び明和町斎宮跡保存対策室の中野敦夫があたり、坂眞弓美、松田早苗、橋本奈保子、尾家恵がこれに協力した。

4．遺構実測図、遺構表示などは、すべて斎宮歴史博物館刊行の調査概報に準じている。

目　　次

1．前　　言……1

2．第81－3次調査……2

3．第81－4次調査……4

4．第81－5次調査……5

5．第81－6次調査……6

6．第81－7次調査……8

7．第81－8次調査……9

8．第81－10次調査……10

9．第81－11次調査……11

10．第81－12次調査……11

11．第81－13次調査……12

12．第81－14次調査……13

13．第81－15次調査……14

14．第81－16次調査……15

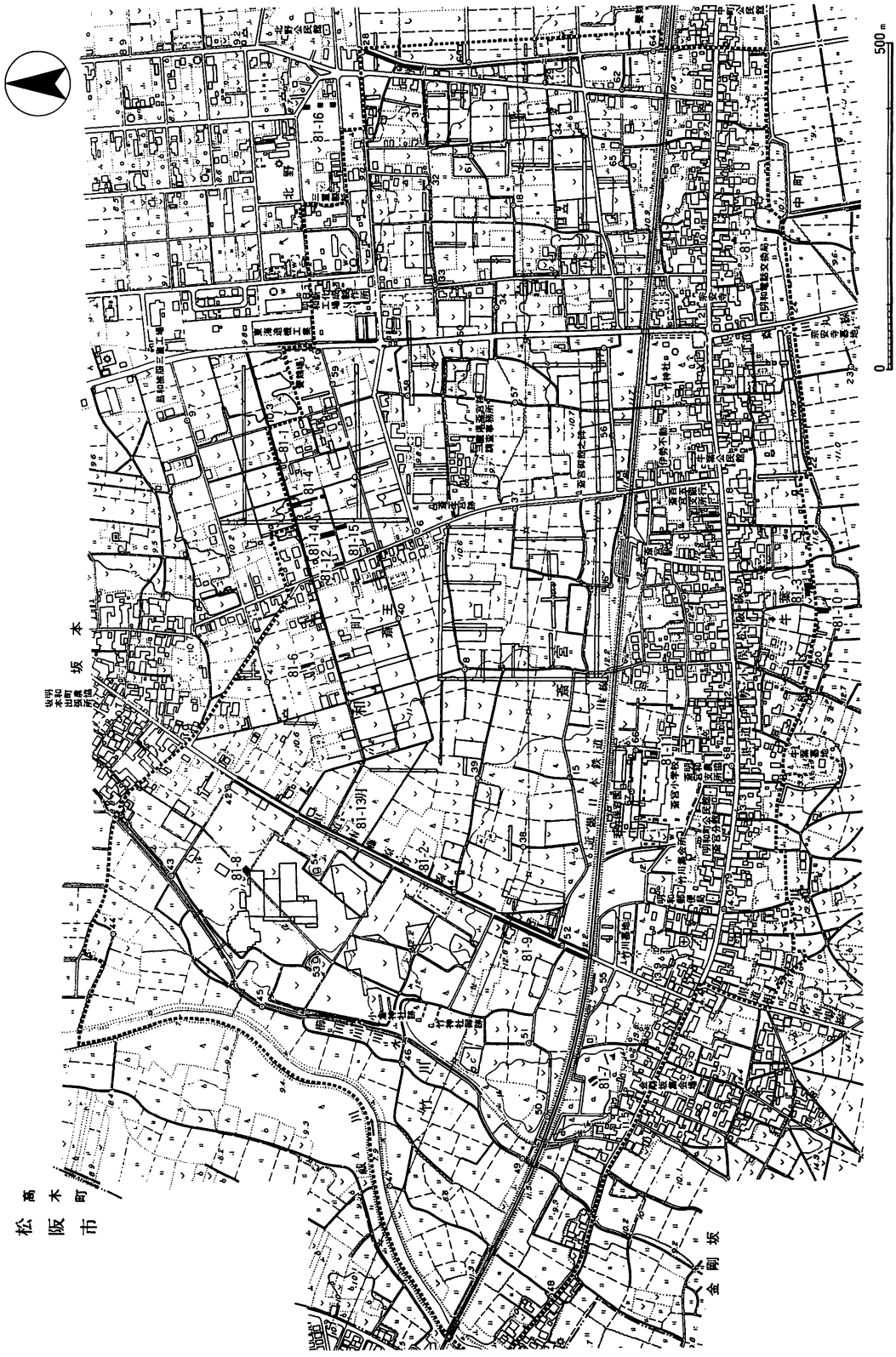


fig. 1　発掘調査個所位置図（1：1000）

1．前　　言

平成元年度の現状変更に関する許可申請は、個人住宅に関するもの33件、史跡内住民の生活環境に伴うもの17件、斎宮歴史博物館を中心とした周辺整備に伴うもの７件の合計57件が提出された。このうち事前に発掘調査が必要であったのは、前年度に申請された５件を含めて16件である。調査面積は、7,091㎡に及び個人住宅に伴うものは、1,061㎡で残りの6,030㎡は生活環境整備や博物館周辺整備などの公共事業に伴うものである。

調査場所は、宮域中央北端の篠林・楽殿地区において６件、宮域西部の塚山・古里地区において４件、宮域南部の旧参宮街道を挟んで５件と宮域の外周に点在している。保存管理計画の土地利用区分でみると第３種保存地区12件、第４種保存地区１件、史跡と接する地区３件である。なお、第４種保存地区の現状変更は、斎宮小学校の施設整備に伴うものである。

今年度の調査は、宮域北部を東西に横断する町道塚山線（第81－１次調査）と南北に走る県道南藤原・竹川線（第81－２・９次調査）のほかは小規模なものであった。

このうち宮域中央北端部では、第81－１・４・12・14・15次調査の５件が集中し、その結果史跡南西の古里地区から宮域の北を通り史跡東端を南北に巡る大溝を第81－１・４次調査で検出した。

また、史跡外で隣接しているために調査したものは３件あるが、第81－10次調査では弥生時代後期の竪穴住居が検出されており、隣接する露越遺跡との関連が考えられる。

第81－16次調査では、緑釉陶器片や平安時代末期の柱穴なども検出されており、斎宮跡の東部北端の範囲がさらに広がることが考えられる。

年　度	現状変更申請数	発掘調査件数	調査面積(㎡)	補助金事業調査件数	補助金事業調査面積(㎡)
S54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
H元	57	16	7,091	9	1,061

2．第81－3次調査（6ＡＤＳ－Ｍ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字木葉山137

原　　因　農業用倉庫新築

調査主体　明和町

調査担当　斎宮歴史博物館

調査期間　平成元年7月4日～7月15日

調査面積　180㎡

1）はじめに

当申請地は斎宮駅から南方約300ｍ、参宮街道から南へ約150ｍで、宮域の南端部に位置する。これまで周辺の調査は、町道を挟んで、すぐ西側で第53－11次調査、第58－6次調査を実施している。第53－11次調査からは、平安時代前期の掘立柱建物2、奈良時代の竪穴住居1、溝1が、第58－6次調査からは、平安時代末期の掘立柱建物1が確認されている。

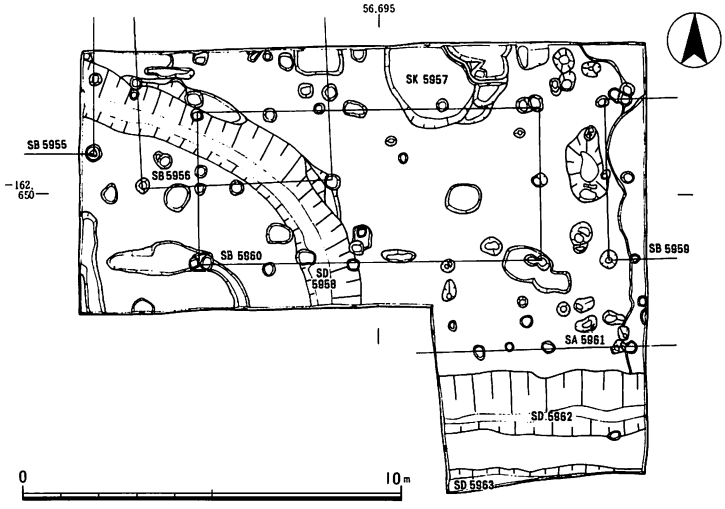


fig. 2　遺構実測図（1：200）

2）調査概要

主な遺構としては、掘立柱建物4、塀1、溝3、土坑1がある。ＳＢ5955とＳＢ5956は平安時代前期、ＳＢ5960は平安時代後期のものである。ＳＢ5959に関してはＳＢ5960の廂とも考えたが、柱間寸法を異にしているので別棟と判断した。ＳＢ5959の時期については出土遺物が余りにも少なかったため平安時代だけとしか判断できない。ＳＢ5960は4間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺約0.3ｍ、深さ0.4ｍである。ＳＢ5956は南北棟、ＳＢ5959は東西棟、ＳＢ5955については棟方向、規模ともに不明である。

土坑ＳＫ5957は2.0ｍ×2.4ｍ、深さ0.2ｍの規模をもつ。平安時代前Ｉ期の杯、皿、甕のほか

黒色土器や鉄斧などの多種の遺物が出土した。ＳＢ5955･5956と同時期の可能性がある。

ＳＤ5958は調査区の西北の隅から南へ大きく曲がりながら走る溝である。幅約1.5ｍ、深さ0.45ｍで、鎌倉時代前半の土師器鍋などの遺物が出土している。

ＳＤ5962･5963は出土遺物がほとんどなく時期の決定は難しいが、鎌倉時代以降の溝と考えられる。なお、ＳＤ5962･5963は上面で検出したときはひとつの溝であったが約1.5ｍ下げたところで２条の溝に分かれた。ＳＤ5962の掘形はＳＤ5963のものと類似しているが、今回の調査では両者の関係は不明であった。

今回調査された場所は宮域の南端部にあたるため、南限の遺構の検出が期待されたが、調査面積も180㎡と小さかったので確認できなかった。

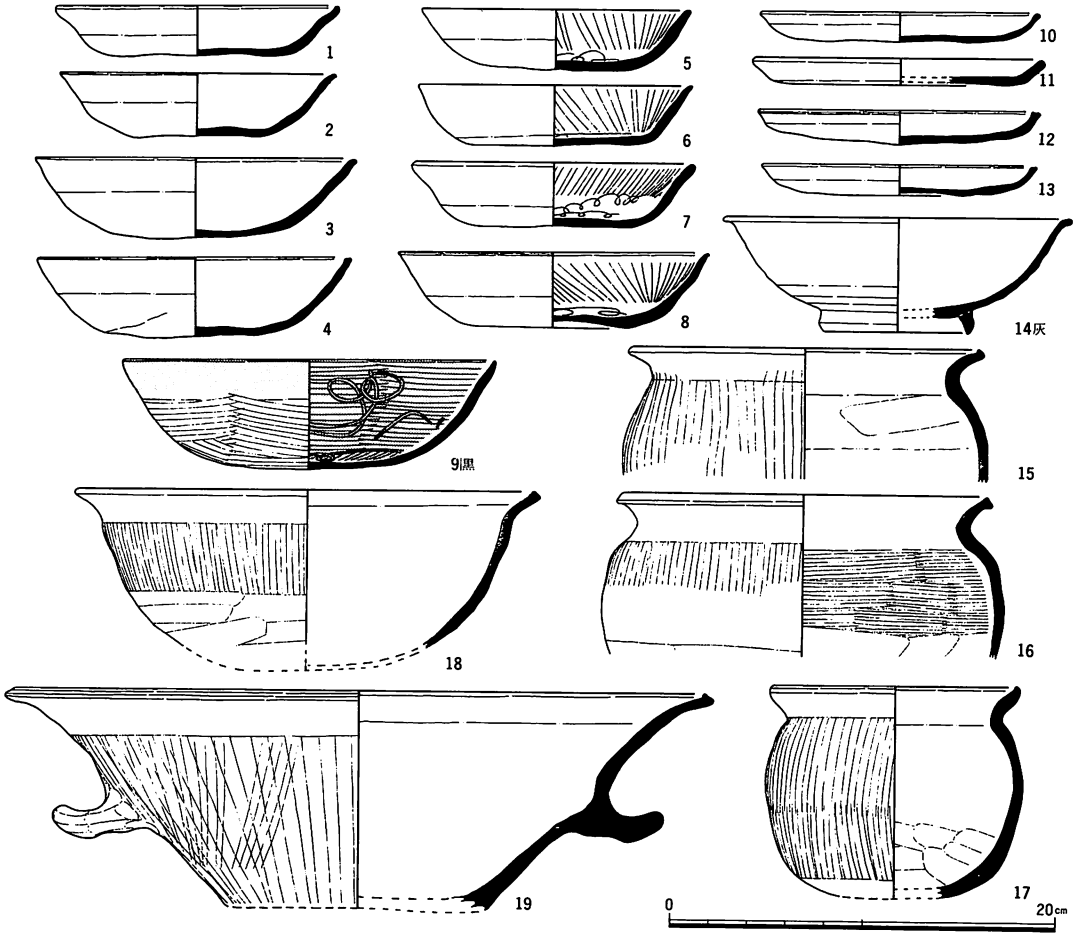


fig. 3　遺物実測図（１：４）ＳＫ5957；１～19

３．第81－４次調査（６ＡＥＤ－Ｊ・Ｋ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字楽殿2881－２

原　　因　個人住宅及び倉庫の新築

調査主体　明和町

調査担当　明和町斎宮跡保存対策室

調査期間　平成元年７月５日～８月９日

　　平成２年２月２日～２月16日

調査面積　214㎡

１）はじめに

当申請地は史跡の中央北部に位置する。調査区は北と南にわかれ、北調査区は、東西8.0ｍ南北8.0ｍと長さ19.5ｍ、幅1.6ｍのトレンチを、南調査区は東西8.0ｍ、南北5.0ｍを設定し、調査した。 周辺の調査では、第６－１次調査が、また、当該地のすぐ東側で第76－14次調査が実施されているが、遺物はほとんど出土しなかったので性格は不明である。

２）調査概要

調査の結果、遺構面までの深さは北調査区で約0.4ｍ、南調査区で約0.5ｍである。検出された遺構には北調査区で鎌倉時代の溝ＳＤ50がある。このＳＤ50は幅約3.0ｍ、完掘しなかったので深さは不明であるが、これは史跡南西の古里地区(博物館付近)から宮域の北側を通り、さらに史跡東端を巡る大溝で、塚山地区で実施された第76－１次調査で幅約3.0ｍ、深さ約4.0ｍの規模である事が確認されている。他に溝、土坑らしきものを検出したが、遺物は出土しなかった。

南調査区では、柱穴らしきもの、土坑などが検出されたが、遺物がほとんど出土しなかったので性格は不明である。宮域の北部にあたる楽殿地区からは、これまで実施されている調査によれば、斎宮寮に直接関係するような遺構は検出されていない。しかし、楽殿地区の西側に隣接する篠林地区から古里地区にかけては奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居、土坑が、東側の西前沖地区では平安時代の掘立柱建物、土坑などが確認されている。

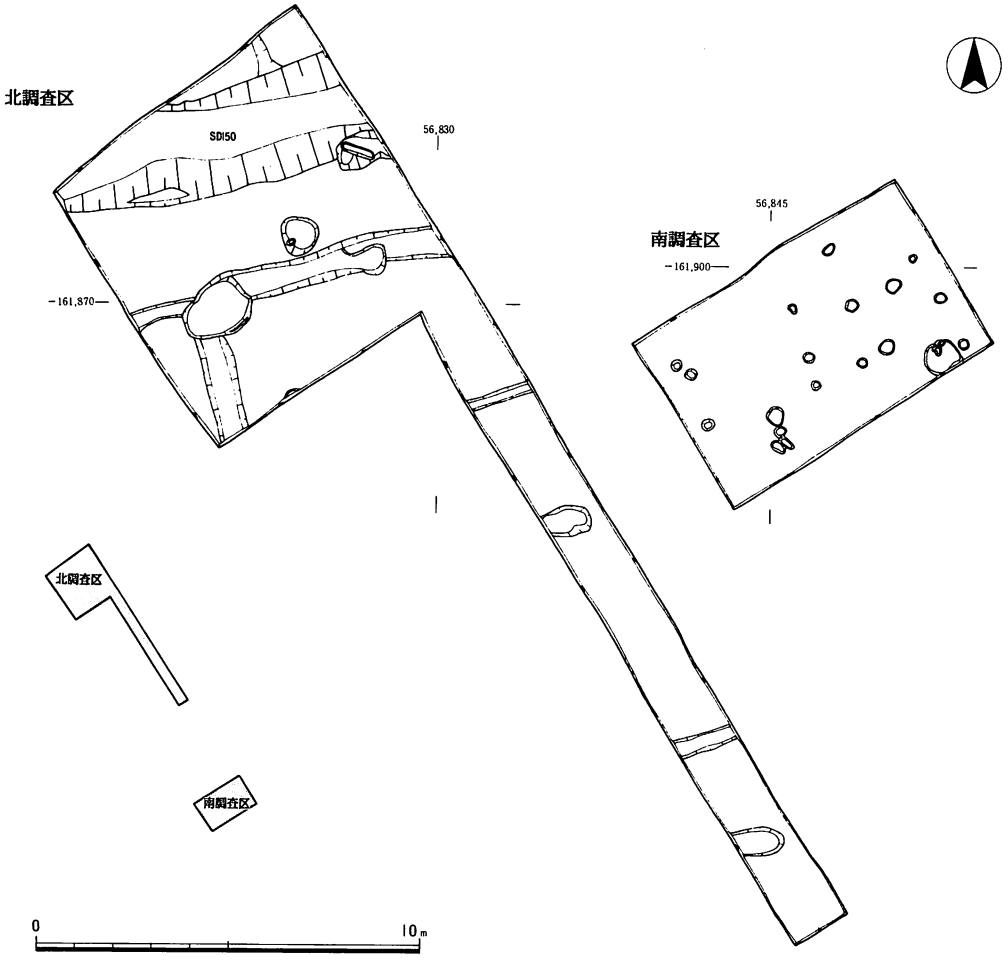


fig. 4　遺構実測図（1：200）

4．第81－5次調査（6AFQ－C）

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字中西5972－2，598－405
原　　因	個人住宅新築
調査主体	明和町
調査担当	斎宮歴史博物館
調査期間	平成元年8月16日～8月18日
調査面積	14m²

1）はじめに

当申請地は近鉄線南側にある竹神社の南東約200mの位置である。北側約50mを参宮街道が通過する。宮域でみると南側東端部にあたる。

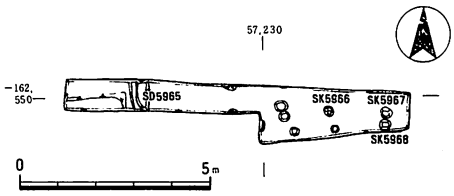


fig. 5　遺構実測図（1：200）

2）調査概要

調査地は個人住宅新築に伴うもので、調査面積は約14m²と小規模で、鎌倉時代の溝1、小土坑群ＳＫ5966～5968を検出した。

発掘区の東側で検出された小土坑群は、調査範囲が狭かったため建物の柱穴かどうか判断することはできなかった。しかし、ＳＫ5966･5968には川原石が投げ込まれており、極めて類似性を持つ小土坑であった。遺物は、ＳＫ5968から明らかに火を受けている鎌倉時代の土師器の小皿が、ＳＫ5966からは動物の後脚部（土製）または何かの土器の脚部らしい破片が、ＳＫ5967から土師器の鍋片が出土した。

なお、調査区の西端は大きく攪乱をうけており、かつて田園であったところに客土して宅地に転用したことは明白で、攪乱はその後のものと考えられる。かろうじて残ったＳＤ5965も鎌倉時代のものと考えられる。

5．第81－6次調査（6ＡＤＤ－Ｆ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字篠林3139－1

原　　因　盛土

調査主体　明和町

調査担当　斎宮歴史博物館

調査期間　平成元年8月21日～8月28日

調査面積　112m²

1）はじめに

当申請地は斎王の森の北西約300m、宮域の中央部にあたる。周辺では、すぐ西側で第25－3次調査が、南西約50mの所で第33次調査が実施されている。第25－3次調査では奈良時代の柱穴、溝、土坑などが検出され、第33次調査では方形周溝、円形周溝、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、井戸などを検出している。なお、調査区がある篠林地区からは、博物館がある古里地区を含めて奈良時代の遺構が数多く検出されている。

2）調査概要

今回の調査地では、現代の攪乱土坑も多く見られたが、竪穴住居1、掘立柱建物2、土坑1、

溝３を検出した。

発掘区の南隅で検出した竪穴住居ＳＢ5975の平面規模は不明だが、深さは0.35ｍで、奈良時代中期の土師器皿が出土している。また、この竪穴住居の真横でＳＫ5796を検出し、この土坑からは、土師器長胴甕の破片を多量に出土した。現段階ではこのＳＫ5976をＳＢ5974の柱穴の一部と考えている。時期は奈良時代後期と判断する。ＳＢ5973も掘立柱建物の一部と考えられるが、出土遺物が細片のために、時期は奈良時代としか判断できない。

発掘区の中央北で検出した土坑ＳＫ5972は1.4ｍ×1.0ｍ、深さ0.2ｍで、東側約３分の１は調査区外で検出できなかったが、奈良時代中期頃の土師器甕が出土している。調査区の北端は大きく削平されており、新しい客土の跡がみられた。出土遺物がまったくないために時期は不明だがＳＤ5969・5970・5971の３条の溝が確認された。

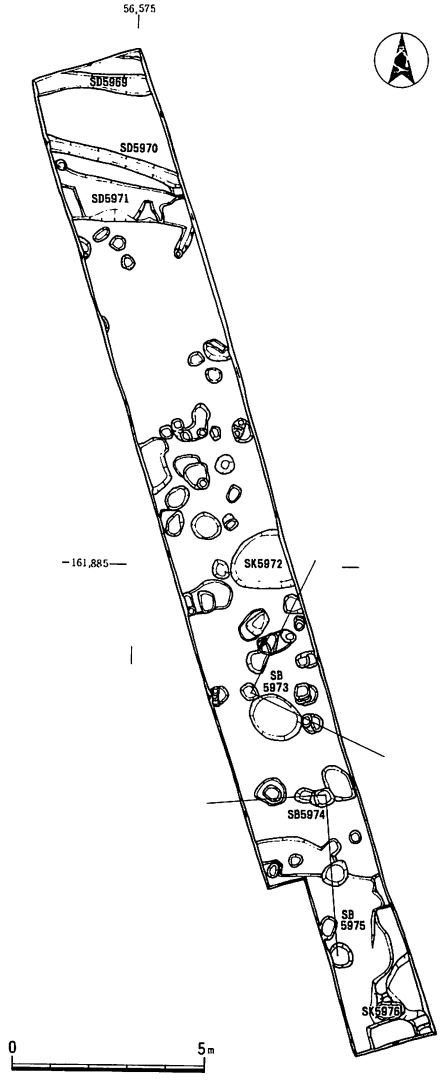


fig. 6　遺構実測図（１：200）

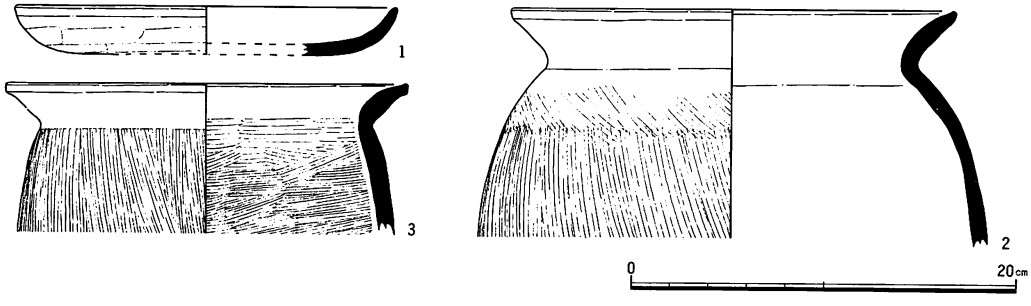


fig. 7　遺物実測図（１：４）ＳＫ5972；１・２、ＳＫ5976；３

6．第81－7次調査（6ＡＢＬ－Ｕ）

調査場所　多気郡明和町大字竹川字中垣内430－7

原　　因　倉庫新築

調査主体　明和町

調査担当　斎宮歴史博物館

調査期間　平成元年8月31日～9月6日

調査面積　36㎡

1）はじめに

当申請地は宮域の南西隅の台地縁辺部で近鉄山田線の南、参宮街道から北へ約80ｍの位置にある。調査区は約12.0ｍ×1.6ｍを設定した。この調査地のすぐ北側で、第16－6次調査が、南側約30ｍでは第48－3次・第70－6次調査が実施されており、南側の二つの調査では、弥生時代中期から室町時代にかけての遺構が検出されている。

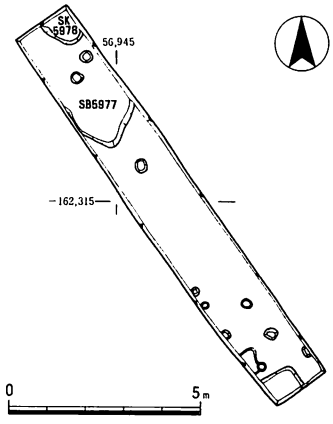


fig. 8　遺構実測図（1：200）

2）調査概要

この調査区で遺物が出土しているのは、調査区の北隅で検出したＳＢ5977とＳＫ5978だけである。ＳＢ5977は竪穴住居で平面規模は不明だが深さは約0.3ｍである。この竪穴住居の特徴は、1.フイゴの羽口とスラグを出土していること、2.西壁付近で白い粘土の固まりが見られること、3.土師器の長胴甕の破片が多いことなどである。以上の事を考慮すると、この竪穴住居から出土した須恵器の蓋は7世紀後半から8世紀初頭であるので、今回検出したＳＢ5977はこの時期の工房である可能性がある。なおこのＳＢ5977のほぼ中央で、ＳＫ5978を検出した。少量の土師器片、須恵器片を出土しており、竪穴住居の付属土坑であろう。

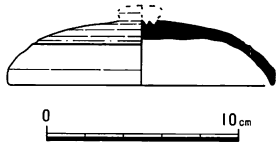


fig. 9　遺物実測図（1：4）

従来、飛鳥時代の遺構が多いとされてきた史跡南部のこの地域に、ある意味で特殊な性格を持つ竪穴住居の存在が判明したことは、その時期の斎宮跡を解明するうえで貴重な資料を得たといえる。

7．第81－8次調査（6ＡＢＤ－Ｐ）

調査場所　多気郡明和町大字竹川字古里

原　　因　便益施設(休憩所)の設置

調査主体　明和町

調査担当　明和町斎宮跡保存対策室

調査期間　平成元年11月28日～12月７日

調査面積　186㎡

1）はじめに

当申請地は博物館のすぐ北側で、昭和63年度に古里地区整備事業で現状変更を実施したイベント広場の西端部にあたる。なお、周辺の調査はすぐ西側で実施された第76－11次調査が、南方では第71次・第72次・第74次調査が実施されている。第76－11次調査では飛鳥・奈良時代の竪穴住居や鎌倉時代の井戸、土坑、溝が、第71次・第72次調査では弥生時代から鎌倉時代の多数の遺構が確認されている。

2）調査概要

調査区の東側で鎌倉時代の土坑ＳＫ5979を検出した。遺物は山茶椀、山皿、土師器鍋片が出土した。

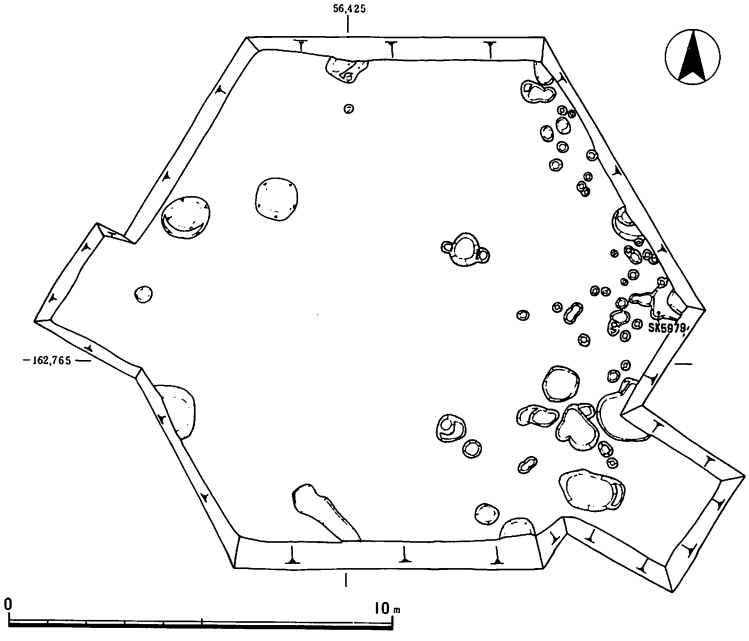


fig.10　遺構実測図（１：200）

8．第81－10次調査（6ＡＤＲ－Ｖ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字木葉山
原　　因　防火水槽の埋設
調査主体　明和町
調査担当　明和町斎宮跡保存対策室
調査期間　平成２年１月６日～１月11日
調査面積　139㎡

1）はじめに

当申請地は、宮域中央最南端で、参宮街道から南へ150ｍの位置にある。周辺の調査は、すぐ西側で第53－11次調査が、さらにその西隣で第58－６次調査が実施され、第53－11次調査では、奈良時代の溝、土坑が、第58－６次調査では、奈良時代の土坑、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

2）調査概要

調査は、南北約20ｍ、東西約６ｍの長方形の調査区を設定した。調査の結果、調査区中央付近で幅0.25ｍの周溝をもつＳＢ5980を検出した。南西隅は、町道の側溝により破壊されている。周溝の形は方形を呈し、規模は南北4.8ｍ、東西3.2ｍ以上である。遺物は、その周溝から、弥生時代後期の高杯がほぼ完形で出土した。史跡内で検出した弥生時代の竪穴住居は、今回で６例目にあたる。過去検出された竪穴住居は、すべて宮域西部の古里地区であり、今回の例は古里地区以外で確認されたという点で貴重な遺構といえる。

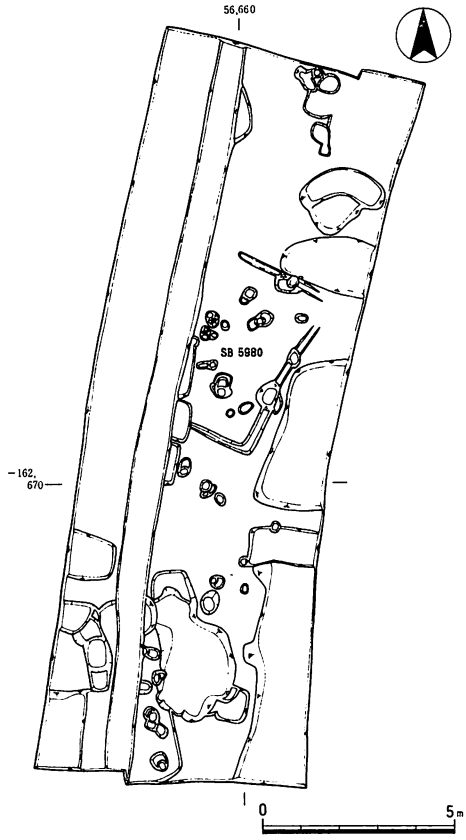


fig.11　遺構実測図（1：200）

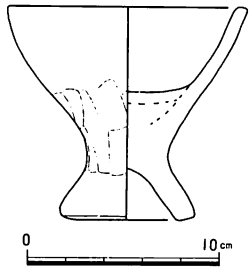


fig.12　遺物実測図（１：４）

9．第81－11次調査（6ＡＣＭ－Ｎ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮3385－２

原　　因　体育庫の移転

調査主体　明和町

調査担当　明和町斎宮跡保存対策室

調査期間　平成２年１月12日～１月19日

調査面積　47㎡

１）はじめに

当申請地は、史跡中央西寄りにあたり、近鉄斎宮駅の西方約300ｍの位置にある。斎宮小学校敷地内では、校舎の増改築に伴なう第15次・第48－13次・第53－１次調査など過去８回の調査が実施されており、奈良時代の竪穴住居、円形周溝、平安時代後期の四脚門、築地跡などを検出している。

２）調査概要

調査の結果、遺構検出面までの深さは北側で0.8ｍ、南側で0.7ｍである。遺構は調査区の中央で検出された鎌倉時代の溝ＳＤ5981と土坑であったが、そのほとんどが旧建物の基礎などで破壊されていた。

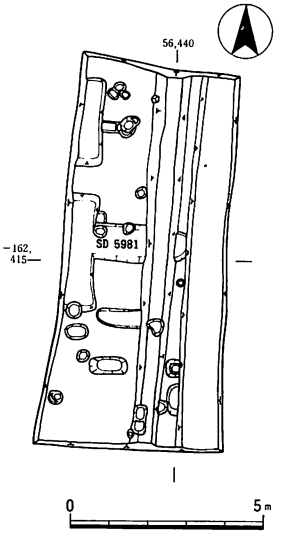


fig.13　遺構実測図（１：200）

10．第81－12次調査（6ＡＥＤ－Ａ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字篠林3225－３

原　　因　盛土

調査主体　明和町

調査担当　明和町斎宮跡保存対策室

調査期間　平成２年２月26日

調査面積　40㎡

１）はじめに

当申請地は、斎王の森から北北東約200ｍで、史跡中央部にある篠林地区の最東端に位置する。当該地の南約50ｍで第37－10次調査が実施されているが明確な遺構は検出されていない。

2）調査概要

調査の結果、遺構検出面までの深さは約0.5ｍである。検出した主な遺構は、調査区の北側に柱穴らしきものと、南端で溝を検出しただけで、遺物の出土はほとんどなかった。

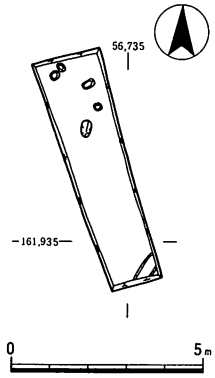


fig.14　遺構実測図（1：200）

11．第81－13次調査（6ＡＣＢ－Ｄ・Ｅ）

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字塚山3276－4，5
原　　因	芝生広場の造成及び案内板の設置
調査主体	明和町
調査担当	明和町斎宮跡保存対策室
調査期間	平成２年３月９日～３月10日
調査面積	16㎡

1）はじめに

当申請地は、博物館の西方150ｍの塚山古墳群内にある芝生広場に案内板、ベンチを設置するため、基礎部分について調査を実施した。当地の北側で第76－１次・第76－６次調査が実施されており、古墳時代の周溝や奈良時代の溝などが検出されている。

2）調査概要

大小９個のグリットを設定して調査を実施した。Ｇ１のＳＫ5982から古墳時代の提瓶が出土し、Ｇ２のＳＤ5983から飛鳥時代の土師器の椀がほぼ完形で２個体出土した。

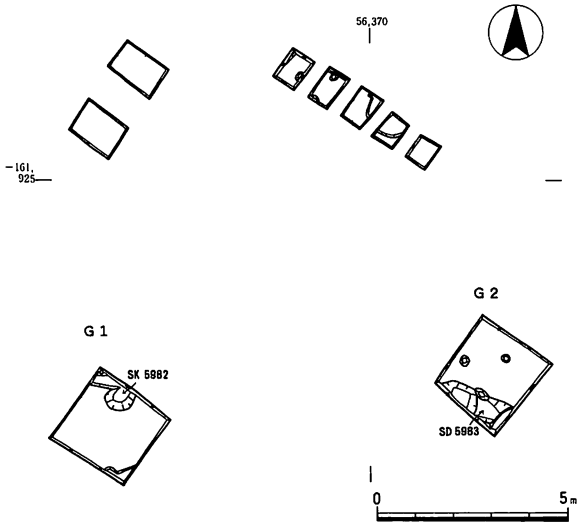


fig.15　遺構実測図（1：200）

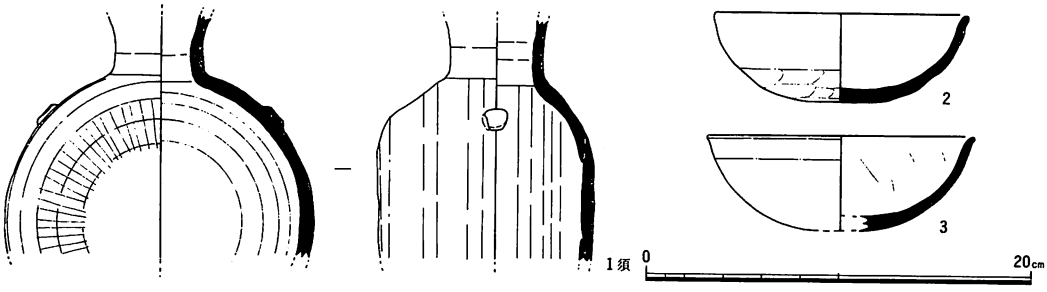


fig.16　遺物実測図（1：4）　SK5982；1．SD5983；2・3

12．第81－14次調査（6AED－F）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字楽殿2844－2

原　　因　宅地造成

調査主体　明和町

調査担当　斎宮歴史博物館

調査期間　平成2年3月1日
～3月30日

調査面積　191m²

1）はじめに

当申請地は、宮域中央北端付近で斎王の森北方約300mにある。

当該地の東方約50mで第6－1次調査が、北方約30mで第37－7次調査が実施され、また、すぐ西では、第43－5次調査が実施されているが、明確な遺構は検出されていない。

2）調査概要

今回の調査では、発掘区北側でSD5984を、発掘区東側で南北に走るSD5985を検出した。出土遺物がなく遺構の性格はわからない。

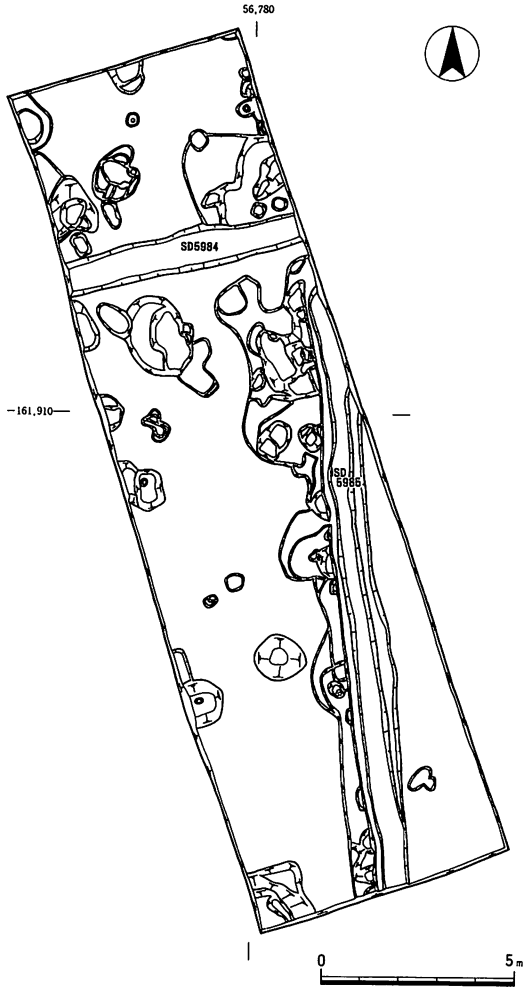


fig.17　遺構実測図（1：200）

13．第81－15次調査（６ＡＥＤ－Ｕ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字楽殿2885－２

原　　因　宅地造成

調査主体　明和町

調査担当　斎宮歴史博物館

調査期間　平成２年３月19日～３月30日

調査面積　220㎡

１）はじめに

当申請地は、斎王の森から北方約300ｍの位置で、宮域の中央北部にあたる。周辺の調査は第81－14次調査が南東約30ｍの位置で、すぐ東隣を第６－１次調査が、北方約60ｍで第37－７次調査が実施されているが、いずれも明確な遺構は確認されていない。

２）調査概要

地表から遺構検出面まで南北とも約0.5ｍである。今回の調査では、発掘区の北で溝ＳＤ5986を、また全域にわたって攪乱土坑を検出した。

ＳＤ5986は長さ約5.0ｍ、幅約0.4ｍ、深さ0.2ｍで、逆Ｌ字の形で検出された。遺物は土師器細片のみで遺構の時期、性格は不明である。

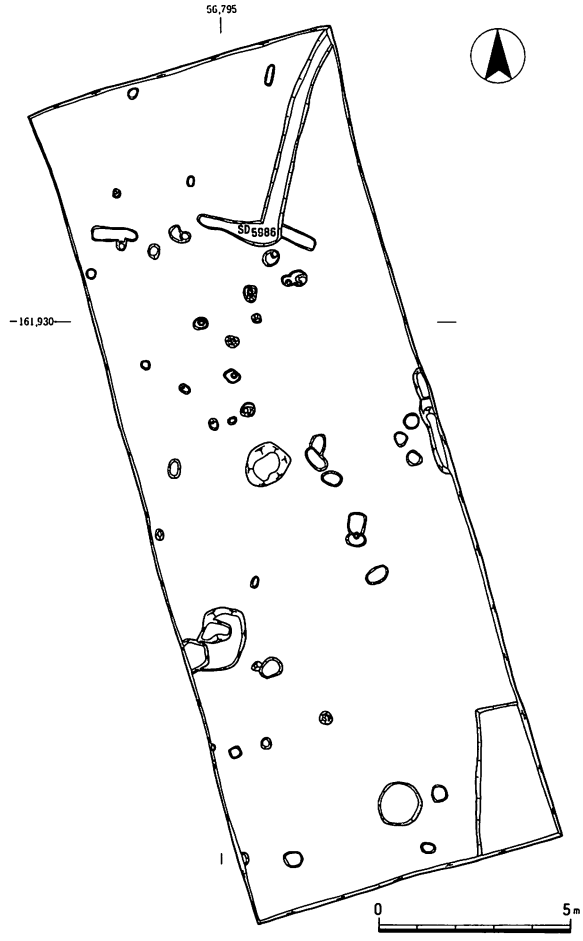


fig.18　遺構実測図（１：200）

14．第81－16次調査（６ＡＧ）

調査場所　多気郡明和町大字斎宮字北野3655－１

原　　因　宅地造成

調査主体　明和町

調査担当　明和町斎宮跡保存対策室

調査期間　平成２年３月22日～３月27日

調査面積　54㎡

１）はじめに

当申請地は、史跡指定区域外に位置し、北野公民館から西へ約100ｍ、史跡東部の最北端に隣接する。当該地の西方約200ｍの位置で、第37－４次調査が実施されており、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、溝、土坑が検出されているので、宮域の史跡東部最北端を再確認する目的で実施した。

２）調査概要

調査区は、当申請地内に３ケ所のグリッドＧ１～Ｇ３を設定して実施した。

Ｇ１・２は時期不明の柱穴、溝などを検出したが、出土した遺物がどれも細片のため遺構の時期、性格は不明である。

Ｇ３は、東西4.0ｍ、南北5.0ｍで遺構検出面までの深さは0.6ｍで、溝ＳＤ5987と柱穴、土坑を検出した。遺物は、ＳＤ5987から緑釉陶器片１点が出土している。また、このグリッドからは、柱穴を多数検出したが、調査範囲が小さいため、建物が建つかどうか判断できなかった。その柱穴の１つから平安時代末期の土師器片が出土している。

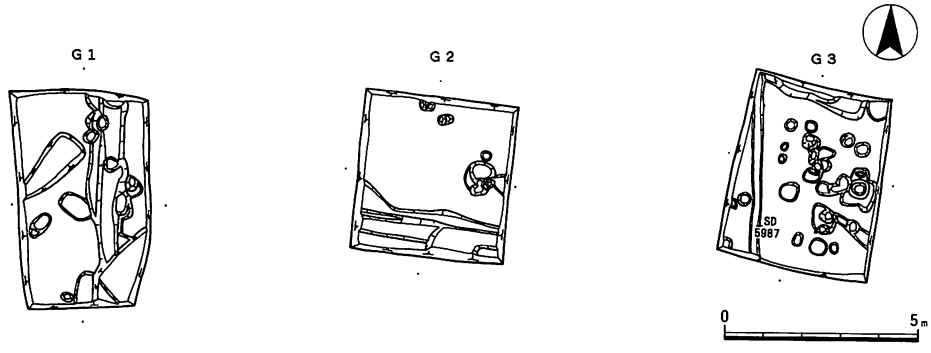
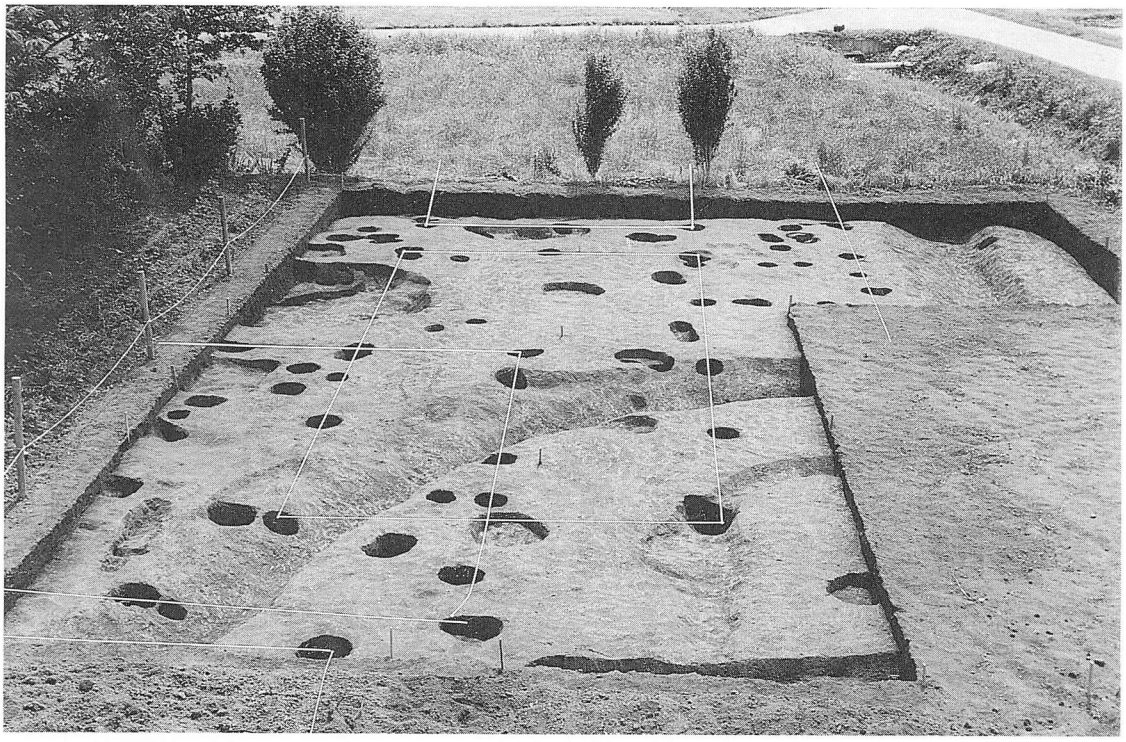


fig.19　遺構実測図（１：200）

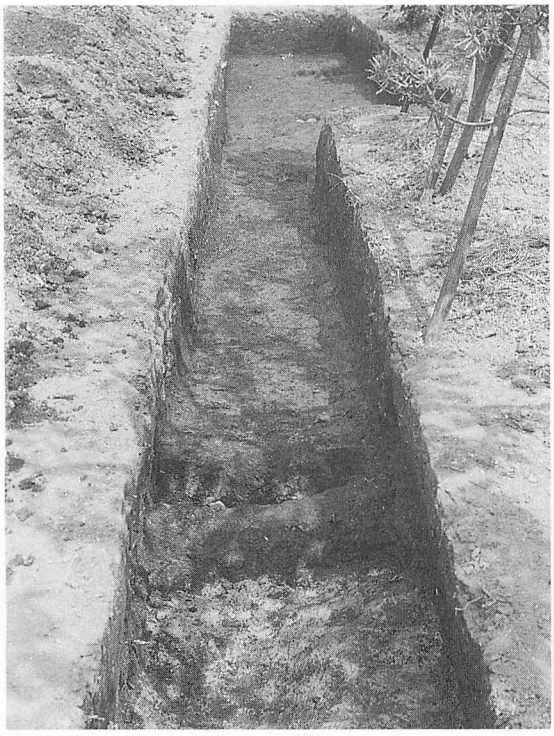
図　　版



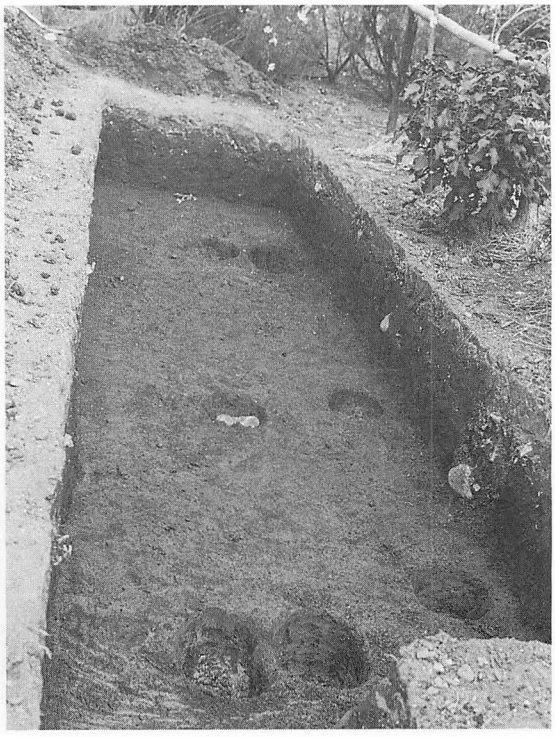
第81－３次調査（西から）

第81－４次　北調査区　ＳＤ50（北から）

第81－４次　南調査区（北から）



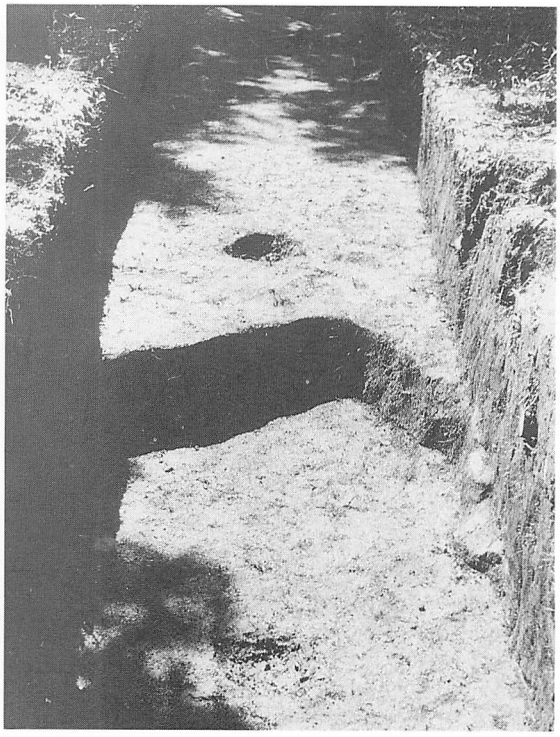
第81－５次調査（西から）



第81－５次調査 小土坑群（西から）

第81－６次調査（南から）

第81－６次調査　ＳＢ5975（南から）



第81－７次調査（北東から）

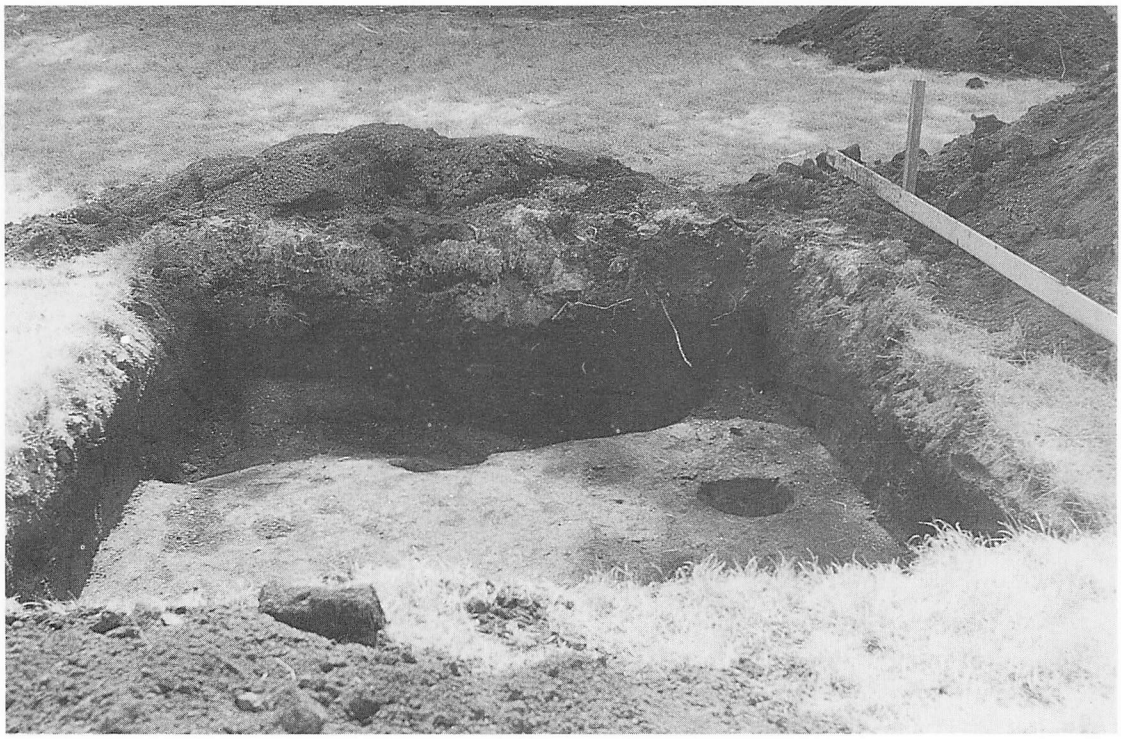
第81－８次調査（南東から）

第81－10次調査（北から）

第81－11次調査（北から）

第81－12次調査（北から）

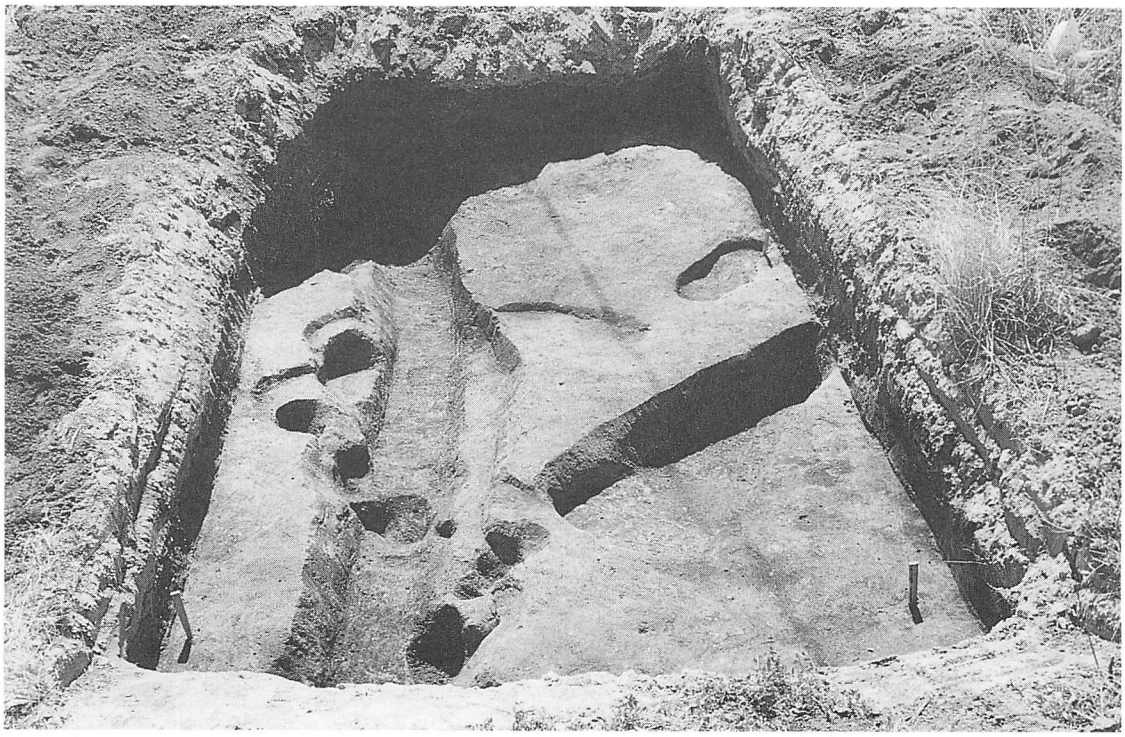
第81－13次調査（南東から）



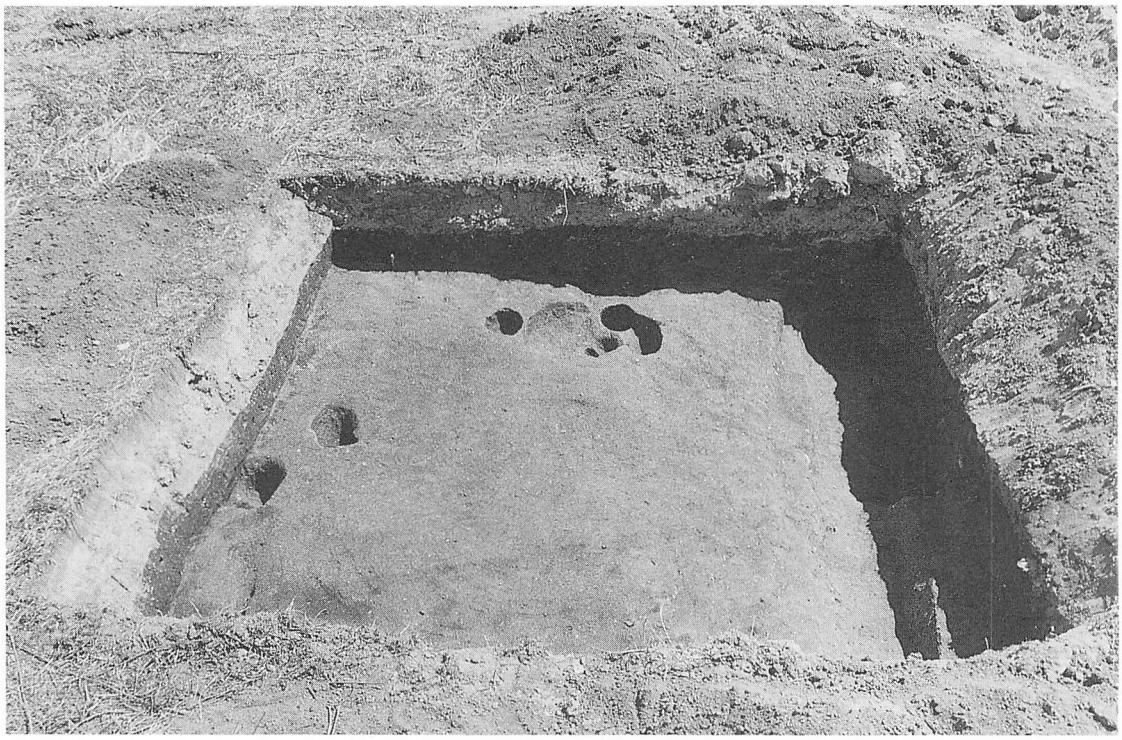
第81－13次調査　Ｇ２（北東から）

第81－14次調査（北から）

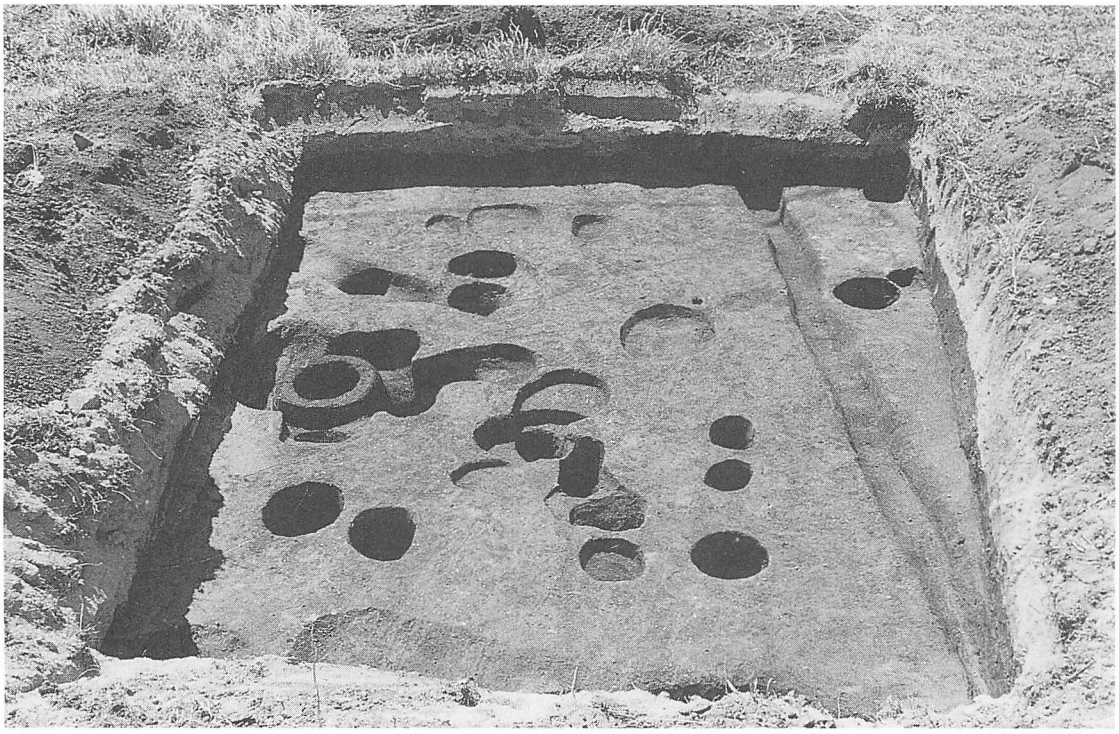
第81－15次調査（北から）



第81－16次調査　Ｇ１（北から）



第81－16次調査　Ｇ２（西から）



第81－16次調査　Ｇ３（北から）

史　跡　斎　宮　跡
平成元年度現状変更緊急発掘調査報告

平成 2 年 3 月 31 日

編　集　斎宮歴史博物館
明和町
発　行　明和町
印　刷　光出版印刷株式会社